

○開会挨拶

それでは開会にあたりまして、埼玉県環境部長堀口幸生よりご挨拶申し上げます。
堀口部長よろしくお願ひいたします。

埼玉県環境部長

埼玉県環境部長の堀口でございます。

本日は皆様業務ご多忙のところ、本当に暑い中、川越のウェスタまでネイチャーポジティブ推進分科会のキックオフイベントに御参加いただきまして、誠にありがとうございます。

そして、皆様には日頃から県の環境政策、中でも生物多様性の保全について、多大なるご尽力、ご協力をいただいておりますことに改めて感謝申し上げます。

本日は、この推進分科会のキックオフに当たり、ネイチャーポジティブ、埼玉県の政策の中でどういう立ち位置ポジションにあるのかということを簡単にお話したいと思います。

これまで埼玉県では、今から40年ほど前に始まりました緑のトラスト活動を始め、里山や平地林をみんなで力を合わせて持つていこうというような活動が活発に行われているわけですけれども、いわば、今までそれは環境部門の中の1つの取組というような位置付けでございました。それが最近はSDGsの広まりもありまして、こういった社会課題はもっとオープンなので、みんなの力を借りて議論、取組をしていこうというような機運が高まって参りました、埼玉県庁の中にSDGs官民連携プラットフォームという共通の基盤が作られました。

そして、こうしたネイチャーポジティブのような課題は、そちらのもとで、分科会を設置して、今までよりも更に開かれた形で取組を進めていこうという形になって参りました。

環境部の取組といったしましては、実はネイチャーポジティブのほかにサーキュラーエコノミー、循環経済の取組が一足早く、昨年度から、このSDGsのプラットフォームのもとで分科会活動を始めましたが、先日その集まりがありましたので、私も参加しましたところ、もう会員の皆様本当に熱心で、自社でどんな取組をしているかという発表も熱心でしたし、今日もありますけれども、交流会の時間には、本当に時間を惜しんで会員の方同士が情報交換するということで、大変な環境でございました。

今日始まりましたこの分科会も、ぜひそんな形で皆様にご利用いただけるような、形に育てていければなと思っております。

ということで本日のプログラムですけども、まずは基調講演ということで、環境省からお越しいただきました大澤様からネイチャーポジティブの基本から実践的な具体的な事例が、コンパクトに理解できるという基調講演から始まりまして、その後は先行的に取り組みされている皆様方のパネルディスカッション、そして戸田市からの事例紹介ということで、そういう盛りだくさんでございます。

そのあとで、先ほど30分とありましたけれども交流会がございますので、ぜひ限られた時間でありますけれども、いろいろな、刺激ですとかヒントを持ち帰っていただければなと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

○埼玉県のネイチャーポジティブの推進について

続きまして、埼玉県のベンチャーポジティブの推進につきまして、埼玉県環境部みどり自然課長の高橋和弘よりご説明申し上げます。

埼玉県みどり自然課長

埼玉県みどり自然課長の高橋でございます。

本日はよろしくお願ひいたします。

今、環境部長の方から挨拶のあった内容と一部重複するようなところがあろうかと思いますが、まず今回ネイチャーポジティブ推進分科会の立ち上げに至った、背景、経緯、そういったことも含めて、埼玉県が置かれている状況なども含めて、簡単にこれから基調講演等でいろいろお話を始めますが、なぜこの取組が動き出したのかというところについて、ご説明をさせていただきます。

まずご案内のとおりネイチャーポジティブという考え方とは、自然を回復軌道に乗せるため

2030年までに生物多様性の損失を止め反転させること、ということとなっておりまして、本当にここ数年、国内外において非常に注目を集めている概念ということになっております。

なぜ行政や環境団体のみならず、民間企業においてもネイチャーポジティブの取組が重要なのか、というお話につきましては、この後ご講演いただきます環境省の大澤様にお任せをいたしますとして、本日は分科会立上げに至った経緯について、簡単に2点お話をさせていただきます。

まず皆様、これもここに集まっている皆様ご案内のところかと思いますが、SDGs ウエディングケーキモデルというものがございます。生物多様性につきましてはこの一番下の環境、のところですね、自然資本という土台がございます。その上に社会活動、経済活動というものがあって支えられて成り立っている、社会全体が成り立っているというところでございます。

持続可能な社会経済活動のためには、環境、つまり生物多様性や自然資本の保全が必要不可欠ということでそういった基本的な考え方でSDGsが進んでいるというところが理解の点でございます。

2点目としましては、本県では、小さくて恐縮ですけれども、県民の皆様から、これまででも県民や地方自治体、環境団体など、様々な主体が連携・協働して、貴重な自然や伝統的景観などの保全に取り組んできた大きな実績がございます。例えば、県民の皆様からいただいた寄附とともに取得した豊かな自然を県民主体の活動により保全していく緑のトラスト運動、こうしたものを県内の14か所で展開しております。その一部につきましては、環境省が認定する自然共生サイトというような扱いにもなっているところでございます。

また、国の天然記念物として指定を受けた、県東部の羽生市の宝蔵寺沼のみに生育する食虫植物のムジナモ、最近名前だけは聞かれることが多くなったかと思いますが、ムジナモは一時野生絶滅していたものの、数十年にわたる地域住民や自治体、大学といった多様な主体が連携した取組によりまして、国内でも非常にまれな事例である野生復帰を果たしたということがございます。まさに、ネイチャーポジティブのシンボル的な事例が県内でもあるというところでございます。

その他にも、このスライドにございますような、国の天然記念物のコウノトリですとか、県の蝶のオオムラサキ、県の魚のムサシトミヨ、こういった希少種の保全ですとか、世界農業遺産にも認定された三芳町を中心とした武藏野地域の落ち葉堆肥農法などについても、多様な主体の連携・協働による取組が続けられているところでございます。

こうした県内各地の取組の蓄積も生かしながら、社会全体で自然を再興していくネイチャーポジティブという新しい概念について、まだまだ知らない方が多いという状況でございますので、こうした考え方を多くの県民の方、あるいは企業の皆様などに、わかりやすくお伝えし、そのあとの具体的なアクションにつなげていくということが、ネイチャーポジティブの実現のためには非常に重要なことであるというふうに県としても考えているところでございます。

一方、企業の取組に目を向けてみると、大企業を中心に取組が進んでいる一方、中小企業等においては、なかなか浸透はしていないというような指摘もございます。埼玉県内の99.8%は中小企業等であるという本県の状況を踏まえますと、こうした企業の皆様のご理解、そういったものが不可欠であり、ビジネスの機会の創出、こういったことも併せて、このネイチャーポジティブの中で進められることを目指していきたいというのがこの分科会の1つの目標でもございます。

そのためには、まず企業の皆様に加えて、県や市町村、環境保全団体などの関係者が一堂に集まって、互いのニーズや情報を共有し、取組のパートナーを見つけることを目指す交流会やマッチング、こうしたことでも、本日以降、この分科会の活動として取り組んでいきたいというふうに考えております。

また、こうした官民連携の取組をわかりやすくお伝えするようなモデル事業を今回ご登壇いただく日本生命様、あるいは埼玉りそな銀行様、こうした民間企業の方々と県との協働による取組、こうしたものについても今後展開していく予定でございます。

様々な課題がこうしたネイチャーポジティブの中にはございますが、今回のこの分科会において、様々な課題を解決するヒントを1つでも2つでもご提供できるように努めていきたいと思っております。

今回のセミナーは、まずキックオフということで、初めのネイチャーポジティブの実現に向

けた第一歩というふうにとらえております。

今後、登壇者の方あるいは参加者の方同士での交流、名刺交換、情報交換などの場を使っていただきて、今日のネイチャー・ポジティブの分科会キックオフが有意義になるようお願いし、また今後引き続き、この分科会への参画やご協力を願いして、私からの冒頭の説明にさせていただきます。

長くなつて恐縮ですが、これからよろしくお願ひいたします。

○基調講演

それでは本日の基調講演に移らせていただきます。

今回基調講演をお願いいたしましたのは、環境省自然環境局自然環境計画課生物多様性主流化室室長補佐大澤隆文様でございます。

大澤様は、環境省や外務省で国立公園の保全管理、外来種対策、生物多様性条約などをご担当されました。現在は企業ビジネス等における生物多様性の主流化をご担当されていらっしゃいます。

本日は、ネイチャー・ポジティブに対する世界の動向、ネイチャー・ポジティブ実現に向けた企業へのメッセージと題しまして、ご講演をいただきます。

それでは大澤様よろしくお願ひいたします。

環境省

環境省の大澤と申します。今日は貴重な機会をいただきましてありがとうございます。30分ほどで短いですけれども、ネイチャー・ポジティブ今日のテーマについて、今の世界と国特に環境省の最近の動きを簡単にご案内したいと思います。資料は事前に電子で送られていると思います。今日4つぐらいのテーマで、このように構成しています。まずは生物多様性を取り巻く現状というところがあります。多分ご存じの部分も多いと思いますので、復習を兼ねて、聞いていただく部分も多いかと思います。

早速ですけれども、生物多様性とか自然というものについて、世界でどういう原因が大きく関係して失われつつあるか。五大直接要因というのが世界的には一応特定されます。

スライドの左下にあるように、昔からよく注目されてきたものとして人為的な開発とか、採取っていうものがありましたが、最近やっぱり今日も暑いですけれども、気候変動、それからあと日本みたいに島国だとやっぱり外来種が大陸から入ってきて、脆弱な在来種が失われてしまうといったことも含めて、この5つの大きな要因が理由で世界の自然が損なわれていく。よく生物多様性も損なわれる度合いをどういうふうに評価するかっていう指標の議論もよくありますが、あまりその1つの指標で綺麗に語れるものではなく、いろんな指標を組み合わせて、語られています。スライドの右側で言うと、例えばその種の数がどれだけ今減りつつあるかということ、それから絶滅のリスクがどれだけ増えているかということを、例えば100万種に絶滅のリスクがありますよといった世界的なレポートも出ました。あとその分類によっては、例えば、このちょっと図が小さくて申しわけありませんが、サンゴとか、やはり降水で発火というのがニュースで報道されていますけれども、今のままで、世界の海洋の多くの範囲から、サンゴ礁が減ってしまうんじゃないかなという予測もされています。

その中でもこのネイチャー・ポジティブというキーワード、2020年のちょうどコロナが始まる頃、このネイチャー・ポジティブというキーワード、よく言われるようになったと記憶しています。つまり下向きにあるこの生物多様性のトレンドを食い止めて反転させないといけないんですけど、反転させるためには、グラフの右下にある緑色のエリア、従来という例えば保護区を作って開発を規制するといった典型的な古典的な自然保護だけではとても足りなくて、例えば気候変動対策とか、水質汚染対策といった、いわば環境対策を総動員して初めて下降トレードを何とか食い止めて上方に反転させることができるというこの考え方を我々はネイチャー・ポジティブと呼んでいます。

国際目標である、昆明・モントリオール生物多様性枠組という2022年に決められた国際目標の文書の中にはネイチャー・ポジティブというキーワードはどこにも書かれていませんが、この

考え方自体は、そういう国際目標の中でミッションとして盛り込まれ、その具体的なターゲットというのが世界的に整理され合意されたというところになっています。これがこの国際目標の概要ということで、2050年までに、自然と共生する世界を実現するために、もう少し細分化して言うと、左側にある4つの項目と右側にある23個のターゲットというゴールを実現するために必要な行動をある程度具体的に目標として示しています。特に、ターゲットの3番、青色の枠の上から3つ目の30by30というのがよく社会でも知られている目標があって、その定量的な目標ということもあってということです。2030年までに世界の陸と海の30%を保全しようという目標があると思います。ただこの他の目標はですね、例えば目標のターゲットの14番、あるいは15番、これらは生物多様性の主流化やビジネスの影響評価開示といった企業の方々にとって、特に重要なターゲットも入っています。

この国際目標を国内で実現するために、国の方では2022年度の末、つまり2023年春、生物多様性国家戦略の改定も行いました。もともとある国家戦略ですけれども、新しい国際的に合わせて国内の目標もリニューアルしたということで、大きく5つの基本戦略から成っています。特に左側の基本戦略1というのは、エリアベース、つまり保護地域とか共生サイトといったある程度土地に根差した典型的な自然保護あるいは保全の話です。30by30といったものも基本戦略1に入っています。真ん中の基本戦略3というのは、ネイチャーポジティブの経済の話で、比較的これは新しい話題になっています。今日この後説明する内容も主には基本戦略3のところになります。

その具体的な中身として生物多様性と経済という方に話を進めます。世界の例えばWEF、ワールドエコノミックフォーラムということで、世界経済フォーラムとして知られている国際枠組みの中で示されている今後10年間で懸念される大きなリスク、世界の経済活動に対して脅威となるリスクの中でも、環境の部分、生物多様性の話っていうのは、トップの方に位置付けられつつあります。その背景としては、スライドの右側にあるように、産業の多くが自然資本あるいは生物多様性に立脚しているので、その自然が失われてしまえば、産業活動も脅威にさらさるということになっています。

企業レベルでいうと、生産から消費までこのサプライチェーンとかバリューチェーンと呼ばれる流れに沿って自然とどういう繋がりがある、リスクとか機会って我々よく言いますけれども、どういう環境に対してどう依存してどう影響を与えて、そしてどういう恵みを得ているかというところを、セクター別あるいは企業別に洗い出して、リスクは最小限化し、機会は最大化するっていう取組をしていかないと、この事業を継続して安定していくことがままならない時代になっているということで、各企業の皆様にも協力していただいて、CSRというよりは、このサプライチェーンとか本業を安定的に維持していくために必要なことをやっていきましょうという方向に話は動いています。

その対策をしていかないと、いろんなコストとかリスクがその企業にとってもあります。これは世界で実際にあった事例として、担当環境対策とか、配慮しなかったことによってあとあと企業がどういう財務的な損失とか、リスクを受けてしまったかといういわば悪い事例を集められたものになります。こういう、展開を避けるためには、やっぱりただ単純にその自然のためというよりはその企業自身のためにも、ちゃんとした対策というのがより重要になってきているというふうに考えてきています。

このスライドでは、ネイチャーポジティブの取組を、この経済活動、産業活動の中で、進めるにあたって今幸い、日本企業は特にTNFDとして知られる、自然関連の情報開示というところについては、スライドの右下にあるように、世界の中で一番、多くの企業がそれに取り組もうとしていて、実際開示レポートと言って、その開示の中で、自然とのつき合い方の見直しとか、目標の設定というのが今少しづつ進みつつあります。またビジネス機会も中央の円グラフにあるように、計算の仕方によって数字が色々と変わってくると思いますが、探すと、いろんな機会がある、ポテンシャルがあるというデータも出てきています。

開示の中身は、たぶん環境省の職員よりも実際に企業でその開示に携わっている方々の方がお詳しいと思いますけれども、よく言われるのはその依存とインパクトそれからリスクと、機会を評価して、目標の設定をして、ネイチャーポジティブな経営に移行していくための計画を作ってアクションにつなげていくということが言われています。情報開示というキーワードだけ見ると何か情報を出せばいいというふうに受け取られる可能性もありますが、やっぱりその

ただ単純に情報をそろえて出すだけではなくて、そのプロセスの中で企業がその指導とどう繋がっているかを見つめなおすして、環境負荷をどう低減して、あるいはどういう機会を創出していくかということを考え行動していくところが一番、大事かなと思われます。國の方では、日本企業が一生懸命開示に今取り組みつつあるところも踏まえて、TNFDの国際的な組織の事務局と連携をして、國からお金もある程度拠出して、日本企業の開示が更に進みやすくなるようなキャパシティビルディング、能力養成事業とか、あるいは共同活動、ちょうど今転換しているところです。

他方、1年ぐらい前、環境省を含め、関係する4省庁で、このネイチャーポジティブ経済移行戦略というのを出しました。こちらは、冒頭にご説明した国際目標がまずあってその下に国内目標としての生物多様性国家戦略が作られましたが、その中の基本戦略3、経済的なところを、更に具体化、深掘りした戦略ということで、1年前に出したものになります。内容としては、大きく分けると3つあります、①企業がネイチャーポジティブの取組をしていく中でどういう機会を創出していかかという整理です。ただ単純にコストアップいうよりは、ビジネスのチャンスとか企業価値向上にも繋がるということを前面に打ち出したいということで、そこを深堀をしたというのが1つ目。他方で企業がおさえるべき基本の要素というのもあって、それをチェックリスト的に、整理したというのが2つ目。そして、この2つの取組を企業がやつていくにあたって、国がどういうバックアップをしていくべきか、あるいはこれからどういうような展開を國から提供していくかという整理をしたのが3つ目、ということで大きく分けると3つの要素をまとめて、パッケージとして出したのが、1年ちょっと前に出した移行戦略になっています。

企業がネイチャーポジティブ経営をする中で押さえるべき基本要素のサマリーとしては、ここに入れた5つの要素になります。ある意味、当たり前のように見えることが多いと思いますが、先ほどちょっと触れた開示も、開示して終わりというよりはやっぱり実際に環境に対する負荷をどう低減していくかということが重要になるので、そういう意味でこの要素の1つ目、まず足元の負荷の低減をといったところ、開示をとにかくいろんなツールを使ってデータを出して、レポートを出すことに一生懸命になりがちな場合もあるので、それよりむしろ要素1にあるような実際の負荷の低減をするというところを思い出して欲しいということも含め、抑えるべき要素を整理したことになっています。

機会とかチャンスについては、なかなか先に結論というか、現状としては、我々環境省側でも、まだまだ実例とか、具体的にどうその価値の向上につなげるかというところは、更なる情報収集や整備というのが必要な状況になっています。ただ、ネイチャーポジティブ経済移行戦略を出した1年前の段階としては、こちらの表にあるように、大きくセクター別に分けて、どういう取組をすると、ビジネスチャンスに繋がるか、あるいはその事業活動の将来的な安定性とか、事業収益の向上に繋がり得るかというのを大きくこののような表で整理をしています。実際にこれの更なる実例を集め、あるいはモデル事業を作るということをこれから更にしていきたいということになっています。

日本の企業がやはりその技術とかものづくりの面で優れているということで、自然とか生物多様性のモニタリングとか評価の分野で色々と新しいビジネスがつくれてそれは世界にも、展開できるとか、あと左下にバイオミミクリーというキーワードがありますが、これは生き物の形とか習性を真似して、人間生活に役に立つものを作り出すっていう技術ですけれども、そういうものも場合によってはネイチャーポジティブに貢献しますし、また自然を生かして、新しいビジネスを作り出すという意味ではよい事例もあり得るということで、こういったものを、小さめのスタートアップ企業も含めて、少しづつ、いろんな事例が出てきている段階だと思っています。

1年ぐらい前にこういった経済移行戦略というのを出しましたが、直近の過去1年間の話に移ると、さらにその移行戦略の中で、大きな方向性を出しましたが、例えば埼玉県という特定の地域に根差した視点とか、それからあと国際的なルールメイキング、国際的な市場の中で実際に使われるスタンダードとかに日本がどう参画していくかといったような視点も含めて、さらに今後何をすべきか、特に2030年までに向けて、何をどういう優先順位をやっていくべきかを整理する余地が残るということで、経済移行戦略ロードマップというのをちょうど、半年間ぐらいかけて専門家が集まった研究会での議論も含めて、整理しております。ちょうどこのロ

ードマップ、近々オープンするというところで、今日はちょっとまだそれを実際に出せる段階ではないんですけれども、研究会のネイチャーポジティブ経済の研究会というのを我々開催して、その会議の資料はサイトに載せておりまして、そこにはロードマップのかなり完成に近いバージョンが案として載っています。地域に根差した視点とか、国際的なルールメイキングについて、それからあとネイチャーポジティブの経営とかファイナンス、金融機関についてどういう取組が考えられるかといった3つの視点に応じて、それぞれの施策を2030年までにどういう時間軸で、国としては展開していくかというのをロードマップの中で整理して、間もなく外に出すという状況に今あります。

ここまでで経済移行戦略、それからロードマップの話をざっとさせていただきましたけれども、他方でやはり見逃せないキーワードとして30by30のお話があります。今日冒頭で埼玉県さんのお話ありましたように、自然共生サイト、これ各地域とも一生懸命熱心に取り組んでいただいていて、既に300以上のサイトが認定をされていて、今年度から新しい法律の施行も始まって、その法の枠組みに基づいて共生サイトの新たな認定が進んでいくところになっています。これがいわゆる従来からある、保護地域による保全とともに、例えば企業による社有林とか神社の社寺林といったものも共生サイトとして認定されると従来から保護地域と一緒に保全エリアとしてカウントされて、国として目指すべき30%の数値目標に向けて一緒に頑張っていくという流れが今あります。

共生サイトの認定基準というのは、結構いろんな視点で何かしらプラスになるものあるいは価値があるのであれば、共生サイトとして認められるように、ある程度フレキシブルな基準を作って、これまで新しい法律を作ることによってその共生サイトが認定されたあつきには、その認定された共生サイトの保全管理にあたって必要な法手続きが、できるだけスムーズにできるようにというところも含めて制度の設計をしてきたというところになっています。

これは最近の新しいサービスというか環境省で出したシステムとしては、見える化システムというのがあって、全国でどこに共生サイトがあるか、あるいはそもそもどこを守る価値が高いのかといったものを地図上に可視化するということをしています。地域の地方自治体が掲げる目標とかもこの地図上で見えるようにしていくということも含めてそれらを段階的にバージョンアップしていくというところに今ありますが、こういうものを整理することで、企業がどこの地域において事業活動するときは特に配慮が必要かとか、どこで共生サイトがあるからそこと一緒に連携して取り組んでいこうといったいろんな検討ができるような後押しをしていきたいと思っています。

あわせて、共生サイトとともに、ネイチャーポジティブの地域づくりという概念、これが先ほど触れた、ネイチャーポジティブ経済移行戦略ロードマップの視点、3つありますが、その視点の1つ目が地域に根差したということで、ネイチャーポジティブな地域づくりを進めたいというふうに環境省では今考えています。つまり地域にある自然資本とか自然資源を有効に活用して、それを守りつつも活用して、地域を盛り上げていくと、企業1社1社とか共生サイト一つ一つといった点ではなくて、できればその点と点を繋いで、面的にその特定の地域が自然を活用して守りながら、その地域の価値を高めていく、そういう事例をふやしていきたいと思っています。これをするためには地域戦略、例えば地方自治体が生物多様性地域戦略というものを作っていたり、あるいは自然資源とか、保全努力の経済価値評価といったデータとか、段々蓄積されつつありますが、戦略があってもデータがあってもその先に行動がなかなかまだ進んでないというところがあるので、既存のいろんな計画とか戦略、それから関連するデータ、それを生かしつつ、関係者で集まって実際のどういう取組をしたらネイチャーポジティブと地域の価値向上ができるかという、行動の促進をしていきたいと思って、これはちょうど今、我々環境省のWebサイトに公募の報道発表出していますけども、これに応募していただいて採択された場合は、この地域づくりの先行事例を作るところにご参画いただけるということになっています。

イメージとしてはこの模式図にあるように、自然資源を守りながら、脱炭素とか循環経済とか、他の環境分野とのシナジーを図りながら、地域の価値を上げていきたいというところになっています。

あとはご紹介ですけれども、我々プラットフォームというものを新しく立ち上げています。この埼玉県さんの分科会と同じように、実は他の県でも、こういったプラットフォームとかネ

イチャーポジティブ経済経営に関する新しい基盤というのが段々今、少しづつ出てきていますが、そういう地域の取組、あるいは企業におけるネイチャーポジティブの取組、これをある程度集結させて、お互い情報を必要としている者と情報を展開したい者がマッチングといいますか、それぞれがお互い知つて新しい協働とか、互助協業、あるいは協働プロジェクトが進んでいくようなきっかけをオンラインの場でも作りたいということで、3月にプラットフォームを立ち上げたところです。会員の企業というのを募っています、会員の企業になったらその自社のネイチャーポジティブに関するサービス・事業をプラットフォーム上に少し紹介していただいたり、そういう情報提供の機会にもなりますし、逆にネイチャーポジティブの技術とかを必要としている企業とか団体にとっては、こちらに訪れていただいて興味のある企業があれば直接コンタクトを取っていただくといったようなことも進めていきたいということで、もしも関心あればこのURLリンク先に訪れていただけると思います。最近我々環境省では、ネイチャーポジティブの経営とか開示の支援ということで、ワークショップとか、こういうプレゼンの場をいっぱい持たせてもらっていますが、こちらのプラットフォームのお役立ちリンク集というところに行っていただくとそういった過去のいろんな動画と、あとプレゼン資料、これも一覧にして、見やすくとまでは言えませんが、ある程度は整理して載せておりますので、例えばその開示の関係の、結構実務的なワークショップの動画とともに含めて、参考になるのかなと思っています。

ということで駆け足になりましたけれども、一応ご用意していた国の取組の紹介は以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

○取組紹介：埼玉りそな銀行

埼玉りそな銀行のサステナビリティ推進室というところから参りました鈴木と申します。

お時間10分程度、我々の取組の方をご紹介させていただきたいと思います。

我々銀行のサステナビリティ推進室、何をやっているかというところですけれども、今日ちょっと僭越ながらお配りさせてもらっているこの2つの冊子、2つとも我々の部署で発行をしているものです。開くと、子供とか、金融教育、あとちょっとサーキュラーエコノミーとか、環境とか、社会包摂、そういう範囲のもの、いわゆるSDGsの分野を全部やってくださいということで、仰せつかってやらしてもらっているというものですございます。

昨年の4月に着任しまして、肌の色が結構黒くなっちゃってですね、これなぜかというと、すべて生物多様性の取組に関して、充実させてもらっているところかなというふうに思っておりますので、また健康的に仕事をしていきたいというふうに考えていますのでよろしくお願ひします。

それでは会社のご説明だけ、ちょっとだけさせていただければと思います。埼玉りそな銀行、頭に埼玉がついておりますので、基本的には埼玉県で事業をやっている銀行でございます。親会社にりそなグループがありまして、全国展開を全国822か店で展開しますと、埼玉県の中では124か店でやっておりまして、もう特徴は、右のとこだけです。個人と中小企業のお取引がほとんどの銀行というところでございます。

続きまして、おかげさまで、こちらの埼玉県内のシェアということで、たくさんのシェアをいただいて埼玉県の皆様とともに発展していきたいなというふうに考えているところでございますということでございます。

我々の中期経営計画は、実はちょっと珍しいというふうに言われておりますが、この電球のマークのところ、埼玉県の5ヵ年計画をベースに、楽しているわけではないんですけども作らせてもらってきておりまして、とにかく埼玉のためにということで役に立とうよということで共創社会のハブになろうという合言葉でやらせてもらっています。上のほうに渋沢翁の掲げた道徳経済合一の息づく銀行を目指すということで、今日も、私の同僚と一緒に、このTシャツを着ておりまして、道徳銀行です。ちょっとアピールの場としてもちょっと使わせていただきました。よろしくお願ひします。

我々が考える共創社会のハブというのはどういうものかといいますのは、ちょっと図でご説明させていただきますと、埼玉りそな銀行は、例えば官公庁様でいらっしゃいますと、指定金融機関ほとんどをやらしてもらっています。学校の取引だとか、企業の取組をたくさんいただいておりますので、そこで様々な課題だとか、そういうものが見えてくるというところ

を情報のハブとして、課題の解決としても解決機関としても動きたいと、その結果、地域のSDGs達成と、それが我々の生きる道なんだみたいなところで、社員一丸となって動かしていただいているということでございます。

今日は生物多様性のお話ですので、左側がこちらの県の生物多様性保全戦略2024年からの計画でございますけども、ここもしっかりと研究して、我々ができること何かなあということを、整合と書いてありますけどもまだ整合できていると思っておりませんが、一緒にやっていきたいなというふうに思います。

昨年、我々のグループでも環境方針を10数年ぶりに改定をしています。これはもう、先ほどから出ていますTNFDとか開示のところ、特に欧州の投資家を意識した変更でございます。環境方針の中に生物多様性、ネイチャーポジティブの文言を入れて、あとはこちらの規定の、改廃権限を実は取締役会決議して、しっかりと会社の体制としてやっていますよという対外のアピールもさせていただいております。

先ほどリスクと機会というお話もありましたけども、我々の金融機関ですので、ご融資させていただいているお客様、こちらの業種の分析をして、我々はどのような形で生物多様性に影響があるのかとか、まだリスクをはかる、量をはかっているような段階で、ここから目標設定をしていかなければいけないなというところでございます。

その中で地域金融機関としては、様々なものを感じるものが実はございまして、埼玉県さんでいらっしゃいますと、この左側のサーキュラーエコノミーであれば、全国で2番目に確かにセンターができたんだと思うんですよね。もう数百の案件が実際持ち込まれていて、循環経済に関する、循環経済の移行に関する問合せだとか実例とか、そういうものがたくさん出てきているというふうにお伺いしております。我々も僭越ながら、こちら久喜のイチゴの事例ですけれども、廃棄されるイチゴを地元のクラフトビールに変えるというのを地元のバスケットボールチームと一緒にやってみたり、そういうものでビジネスに何が繋がらないかなというトライアルが進んでいるような領域がこのサーキュラーエコノミーかなと思います。また、右側のカーボンニュートラルに至っては、設備の更新だとか、そういうタイミングで省エネの補助金を使っていただいている企業さんもたくさんいらっしゃると思います。こちらも分科会が立ち上がっておりまして、この2つの領域っていうのは、分科会がかなり盛り上がっているのかなというふうに思っています。そして、今日ネイチャーポジティブということで非常に集まりいただいて、分科会がキックオフでございますけれども、実はこここのところをもう個別の考えではなくて、常に相関関係で関わっている領域なのかなというふうに考えています。ですので、サーキュラーエコノミーが入口であってもしかしたら生物多様性にいい影響を与えるかもしれませんし、カーボンニュートラルも同じように言えます。ネイチャーポジティブから入るところというのは今すごく難しい、どうやったら経済に移行できるかなというところがすごく課題ですけれども、ここも実際には現場で一緒に活動していて、一緒にお話をさせていただいて、新たなビジネスを考えられたらなあというふうに考えて、今日も登壇させていただいております。

こちらは1例ですけれども我々金融機関、埼玉りそな銀行だけではなくて、地域の金融機関さん、いろんなメニューを持っています。こちらはカーボンニュートラルに関する様々な金融商品の一覧です。1個1個はちょっとご説明できませんが、意識を醸成するものから、課題を把握していただくコンサルティングだとか、実際にこういう融資を利用していただいて、目標を目指す、そのようなところでラインナップは既にございますので、ここに新たに生物多様性の考えが入ってくるのかなというふうに考えております。

それでは残り3分でございますので、我々の生物多様性に関する取組の方をちょっとご紹介して終わりにしたいと思います。まず一番左、埼玉りそな森づくりというところでございます。2010年に埼玉県さんと長瀬町さんと森づくり協定をさせていただいて、それ以降、埼玉りそな森ということで、宝登山、ロープウェイを持ったところに、実は一番目立つところに埼玉りそな森というのを契約させていただいております。最近ちょっとコロナがあって、少し人の活動というところはできませんでしたが、今年からまた、再開をして、自然の保護だとか、こういった地元の地域の振興だとかそういうところに役立てたいなというふうに考えております。この役職になってから、何度もお邪魔をして写真を撮ったりとか、森づくりの当日どうしようかなというところで、私もちょくちょく行っているんですけど、最近ちょっとロープウェ

イが工事中でして、ただ長瀬まで行ったので行かない手はないと思って歩いて1人で登っていたら、なんか人が結構少なくて頂上まで無事にたどり着いて写真を撮ったり、目的は果たしたんですけども、帰ってきたときに、看板があって、1人で入るなって書いてありました。ちょっと身の毛のよだつ「一人で入るな」という熊の絵があって、ちょっと嫌な気持ちになったということがありますけれども、こういった形でやっております。真ん中のムサシトミヨの方は、本当に日本生命さんとあと埼玉県さんにお誘いいただいて、実際の県保有地訪れて、結構林なんすけれども、結構そこの下草刈りをさせていただいたりして、地元の風景ですかね、将来こういうふうになつたらしいなみたいなことをすごく感じ取れる活動をさせていただいています。ぜひご賛同いただける会社さん、団体さんあれば、今後活動が広がるかなと考えております。また、見沼田んぼのクリーンウォークも長きにわたって会社ではやっているんですけど、最近は、やはり上場企業の例えれば関東支社さんだったり、地元の企業さんも一緒に参加して、一緒にこの見沼田んぼを綺麗にしようねなんていう協力の事例もできております。

我々の銀行の子会社で、地域デザインラボさいたまというとこがあるんですが、ここも埼玉県さんの埼玉リバーサポーターズプロジェクト、川の再生のプロジェクトのところで、事業のSNSを活用した情報発信だとかそういうものの事業を請負ったり、右側入間の大森調節池でお手入れとか生き物ウォッチング、そういう事業にも子会社として携わらせていただいたというところでございます。

グループ全体では、被災地のある宮城の仙台のところに毎年育樹をしたりとか、兄弟銀行である関西みらいみなど銀行もそれぞれ地域で、活動することで地域の課題というのを把握して、何か地元の企業さん団体さん個人さんと一緒に何かできないかなというふうなことを模索しているような段階でございます。

最後になります。昨年から企業さん向けに訪問させていただいて、ネイチャーポジティブってご存じですかという話から、どんなことを期待しますかみたいなアンケートを色々とさせていただきました。やはり皆さん中小企業さんですと、取り組みたいんだけど何から始めたらわかんないよとか、あとは他社の好事例とか何か知りたいとか、あとは1社だとちょっと予算が不足しているとか、人手だとかあんまりそういうところやはり難しいんだよねみたいなそういう意見がありました。自治体さん、団体さんに聞いても、記載のようなご意見があつて、やはりこの分科会キックオフするにあたって、解決の方向性という感じで示させていただいてますけどやっぱり、一番下のビジネスモデルの創出だったりするところが一番の肝かなというふうに考えていますので、ぜひ皆さんと色々とお話をさせていただいて活動をさせていただいて、いい方向に持つていけたらと思います。今後もよろしくお願ひいたします。

○パネルディスカッション

ファシリテーター

環境省大澤さんからご説明があるとのことなので、そちらのご説明をお願いします。

環境省

今日、自分のプレゼンの中で、もうちょっと具体的な事例というのをどこまでご紹介したほうがいいかなと思って、このスライドをプラスアルファで用意していたところです。今2社からの活動の取組をお伺いして、このスライドを見返した時に、例えば、このスライドで言うと一番下に熊本の事例があります。自分自身去年の夏まで熊本に住んでいましたが、熊本に肥後銀行という地域の金融機関があって、やはりその地域の金融機関でその地域をちゃんと盛り上げていかないと、自分たちの存在意義というか、将来を含めて、結構今分岐点にあるという危機感もあって取り組んでいるところがあって、熊本というと例えば半導体の工場が進出しています。半導体の工場で地域が盛り上がりつつありますが、水をたくさん使うということで、水をどう維持していくかなければいけないか、地下水で100%水道が賄われていて水道の蛇口をひねればミネラルウォーターが出るという、実際科学成分もミネラルウォーターと遜色ない水道水が出てくる地域すけれども、その地域の水を守りつつ半導体の産業を両立させていくためはどうしようかということを、地方自治体だけではなくて肥後銀行みたいな地域の金融機関が一緒になって今、取組をしていて、このスライドの下側にあるのは、グリーンインフラという最近雨庭とか、結構ハイテクというよりかはローテクすけれども、自然を活用して水源涵養の

いろんな地域の取組を進めていくことで水を守るという取組、これも熊本の場合はもともとその上流に阿蘇の草原自体があるのでそこも関係してきますが、その地域全体での自然を活用した水の涵養というのをやりながら地域の新しい産業の半導体の産業を育っていく、守っていくということで、クレジットの話も少しありましたけれども、例えばウォータークレジット、あるいはその水資源とか自然資源を経済価値に落とし込んでいって、水を使う人と水を守る人の間である程度の取引というか、お金の循環をやって水を守っていこうということをこの金融機関がある程度引っ張ってやっていくっていうことも今生まれようとしています。それ以外に、このスライドで言うと左側にあるコウノトリ、これは埼玉県も関係すると思いますけれども、コウノトリとかトキとかシンボルとなる種を再生保全しながら、例えばお米とか、地域の產品の創出も一緒にやっていく。それから右側にはもう水資源を、これもまた使ってサントリーミたいな企業は、自然を守りながら自分の商品を提供していくということをやっていく。それを今流行りというか、注目されているこの自然共生サイトとも関連させながらやっていく。自然共生サイトというのは1つのPRとか注目を浴びるきっかけになると思いますので、共生サイトの認定を受けて、この企業の、あるいは地域の取組を周りに認識してもらひながらやっていくっていうことが各地で生まれつつあります。なので、今日は、共生サイトの話、後半に自分の場合プレゼンして前半、経済活動を話して、その両者をどうつなげるかと言うのがあんまりこう説明しきれませんでしたが、説明するよりも、実際の事例、こういうのが少しずつ生まれていて、それは他の地域の皆さん、色々と行かれた際に、例えばどこか旅行に行くときに共生サイトもどうせならついでにちょっと調べて行ってみるとあると色々と学べるところがあるかなと思っています。

あとは、これも自分のプレゼンに先ほどちょっとモニタリングとか計測の技術で、新しいビジネス機会を日本の場合、色々と獲得できると話をしたときに、これ具体例として入れていなかったものでけれども、例えばこの真ん中の環境移送技術というものがあります、これ水槽の中で海洋環境をミニチュア版で人工的に創出することで、わざわざその海に行って調べなくても、この水槽の中でいろんなことが測れたり調べができるっていう新しい技術として聞いています。例えば、日焼け止めクリームがサンゴに悪影響をどれだけ及ぼすかという環境影響評価をするときに、わざわざそのサンゴのある海に行って日焼け止めクリームをそこにこう垂らして調べるというのはなかなか大変なことで、この水槽の中でサンゴを育てて、そこにその日焼け止めクリームなりを少し垂らして有害性とかインパクトを図るということができると、簡易にこの水槽の中で色々とできる。ある意味、海のない埼玉県でも海のミニチュア版を水槽の中で創出して、いろんなことができると言ったような、新しいアイディアも生まれつつあるという事例になっています。

他にもいろんな中小企業の取組というのは、なかなかまだこれから事例をたくさん作っていないといけないなと思っていますが、地域では、例えば商品の価格のごく一部を、環境保全、環境保全といつてもCSRというよりかは中小企業が提供する商品の生産地の環境を守って、つまりその生産のサプライチェーンを将来的に維持していくための環境保全に価格の一部を割り当てて、消費者からもつまりお金をいただいて、守っていくという取組があちこちで生まれつつあるので、そういうものも含めてやっていくということで、これは大企業だけではなくて、ある程度中規模小規模企業でもやれる事例としてこういうものも面白いかなと思っています。

ファシリテーター

では、テーマを決めてのディスカッションへ進んでいこうと思います。
最初のテーマですけれども、ネイチャーポジティブを実現する取組を行うに至った過程とその中で最も大変だったこと、こちら大変だったことをどのように解決したのかということを含めて、日本生命さんの事例と埼玉りそな銀行さんの事例から伺っていければと思っています。
まず最初に日本生命の岩本さん、お願いします。

日本生命保険相互会社

最も大変だった事例紹介、かつ、ごめんなさい、この解決に至ったとなっていますが、解決していない状態です。というのはそもそも、こういった企業にとってネイチャーポジティブは企業にとってどんな状態を実現すればネイチャーポジティブと言えるのかというところがなか

なか難しくて、これは担当者で私もまだ完全に理解できていません。

実は、気候変動の方のCO₂のネットゼロというのはどういう状態にしたらネットゼロになるかというのはもうクリアになっている。ところが、このネイチャー・ポジティブはどういう状態に持つていったらネイチャー・ポジティブなのかということを、担当者の私も当然まだ完全に分かっていなくてそれを会社の経営陣に分かってもらうって、更になかなか難しくて、経営陣と何度か色々とミーティングはしていますが、いまだにごめんまだ納得できないと言われている状態です。

だから、私もこれからまだ数年かけて、日本生命にとってネイチャー・ポジティブというのがどういう状態か、どうということを継続しどういう行動をすればネイチャー・ポジティブと言えるのかというところを今探っているというのが現状です。すいません。解決には至っていない状態です。

ファシリテーター

先ほどプレゼン聞いていて、やはり数値化して見えるようにするというところが日本生命さん、すごく丁寧に取り組んでいらっしゃるのかなというふうに思いますが、その辺をやはり意識して数値にしましようみたいなことをやっていますか。

日本生命保険相互会社

結局CO₂は完全に数値化されていて、足し算引き算を簡単にできる状態です。

ところがネイチャー・ポジティブ、結局は、例えば我々が依存をしている土地だったり水だったり、紙だったりして、これそれぞれ全然違う、なんかもう単位なんですね。平米だったり、枚数だったり、立方メートルだったり。それで、そういったものを何か統合的に表すというようなことはなかなか難しいと思っていて、それぞれのものを数量化するというのはできるんですけども、それを統合化する、そういった部分がまだちょっと我々も見つけられていないという状況かなと思っています。

ファシリテーター

もしこの会場にいる方々が自分たちの事業を評価したいとか、どれだけネイチャー・ポジティブに負荷をかけているのかみたいなことをやろうとした場合に、使える指標だったり、先ほどLEAPアプローチという話もありましたけれども、そのあたりでこれから始める企業さんが使えるものってどんなものがあつたりするのでしょうか。

日本生命保険相互会社

環境に与える負荷のデータというのはおそらくもうどこの企業さんある程度分かっていると思うんですよね。どれだけ土地を使っているかとか、どれだけ水を使っているか、どれだけ電気を使っているかとか、あるいはCO₂をどれだけ排出しているかというのは分かっていると思います。

難しいのはそういう負荷のデータを総合化するということが1つと、あとはネイチャーにとってポジティブな活動を色々といろんな企業がやっていますが、それを数量化するというのはなかなか難しくて、例えば我々サンゴの白化を抑える活動していたり、絶滅危惧種のオオルリシジミという蝶々を保全する活動をしていましたが、こういったバラバラにやっている、全国各地でやっているボランティア活動を数量化して統合するというのがなかなかまだ私にもできていないというところで、おそらくなかなかちょっと数年かけないと難しいかなと思っているところであります。

ファシリテーター

続きまして、埼玉りそな銀行さんの事例からお願ひできますでしょうか。

埼玉りそな銀行

埼玉りそな銀行では、先ほどご紹介させていただいたとおり、埼玉県さんが目指すものに關

しては、基本的にどうやつたらそれをお手伝いできるかなど、そういう視点で経営とも会話をするので、生物多様性を実現する上で何か実現しようとする動きに対する社内の障壁みたいなのは全く、感じませんでした。

今、結局ネイチャーポジティブというような名前が出てきましたけれども、過去から震災の当時から、例えば仙台に植樹をしに行ったり、これも結局、自然再興に繋がっている動きでしょうけれども。どうしても我々過去に多大な公的資金をお借りして建て直させていただいた経緯もありますので、とにかく社会にいいこと、環境にいいこと、そういったところは社会への恩返しということでやっていこうという考えがありましたので、その辺の経営陣との最初の1歩というところの障壁はなかったというふうに感じます。

ただ、先ほど来から申し上げているとおり、ではその活動がどのような影響を与えていくのか、とか、あとは一番悩んでいるのはやはり我々の一番のお客様である中小企業のお客様とどのように協業して埼玉県が良くなっていくのかというところはまだ見えていないところでございます。

ファシリテーター

やっぱりインパクトをどう図るのかっていうところがニッセイさんとソナさんと両方共通している点かなと思いますが、これは環境省の大澤さんに聞きたいんですけども、外部的に企業の取組とかをこのインパクト評価するみたいなところは、何か枠組みだったり仕組みがあったりするものなのでしょうか。

環境省

まず国レベルぐらいグローバルスキルで言うと、エコロジカルフットプリントという1つ指標があって、例えば国が出すCO₂を自然の草原とか森林が吸収する必要な面積がどれだけ必要かという、面積計算で国が出すその環境負荷を一応統合換算してフットプリントとして出すという指標が既にあります。企業によってはそのエコロジカルフットプリントを企業レベルで、計算して会社の中に出すというのも事例としてはあります。

ただエコロジカルフットプリントも、ちょっと範囲がスコープの範囲が必ずしも、網羅的ではないというのがあって、例えば生態系サービスっていう、要は自然から得られる恵み、そもそも目に見えない、例えば文化的なサービスとかそういうものも含めてどれだけそれに事業活動のインパクトを与えてるかという包括的な評価というのは必ずしもできない状況があって、ちょうど今環境省では、環境関係の専門家、具体的には早稲田大学とかと連携して新しい指標としてネイチャーフットプリントという、これもフットプリントですけれども、新しい定量的指標を作ろうとしています。それはつまり事業が企業の事業活動でどれだけ環境にインパクトを与えたかを一応統合的にかつ金銭価値で換算する指標として作ろうとしていて、それができると、例えば炭素で言う、ファイナンスドエミッションみたいな、要は金融機関が投融資を通じてどれだけ温室効果ガスを排出しているかという定量的指標がありますけれども、そのネイチャー版にもなり得る。金銭価値で評価することで、事業レベルだけではなくて投融資の観点からも、どれだけネイチャーにインパクトを与えたかという評価をすることができるようになるとその中で、じゃあ次そのフットプリントの低い事業活動に投融資しようという判断にも使えるようにしたいという一応理想を掲げて、昨年度、今年度2年間かけて、そういう指標を開発ちょうどしようとしています。

すでにEUとか他の地域では同じような発想でPEFとかLCPっていう実は似たような指標も一応あつたりは聞いていますので、探せば一応そういういくつかの指標はあります。残念ながらちょっと世界で足並みが揃っていないというか、地域とかセクターによって使う指標が違つたりするので、総合比較とかがまだなかなかしづらいとかというような課題もあります。

ファシリテーター

ありがとうございます。

では2つ目のテーマにいきます。

活動することにより、企業の社員の方ですか、その社員の方の業務の中で生じた変化、効果、

メリットがありましたら教えていただければと思います。例えば、参加した社員とか家族、それから参加していない従業員を含む全社的な反応ですとか、事業に対する生物多様性への配慮とか。こちらも日本生命さんからお願いできますでしょうか。

日本生命保険相互会社

日本生命では全国に 200 ヶ所、ニッセイの森というのを持っていまして、そこについて、年間 50 ヶ所ぐらいで植樹とか間伐とか、下草刈りというのをやっておりますけれども、これ従業員だけではなくて従業員のご家族とか、ご近所の方も参加していただいていますが、喜ばしいのか悲しいのか分からないんですけれども、そもそもこの森に入ったことがなかったという方が結構いらっしゃって、そもそも木を切ることが初めてだとかということがあって、結構、自然に触れる体験をまず提供をできているということがあるのと、結構、我々その間伐材とかを作ったら、それをいろんなことに利用したりしているので、我々生命保険会社なので形のあるものは売っていませんが、そういった間伐材を利用して、何か物を作ったりすると大変喜ばれたりするっていうのが 1 つ。

もう 1 つは、ちょっと埼玉県は海のない県なのであんまりぴんとこないんでしょうけれども、海洋プラスチックごみの清掃活動というのを結構やっていましてね。九州の例えば西側の方の海岸って本当にびっくりするぐらい海洋プラスチックごみがたくさんあるんです。やはりそういうものをみんなで集めて清掃して、やはり一旦綺麗になるとものすごく達成感あります。普段では得られないような達成感が得られるということもあって、そういうことを我々会社がやはり色々と仕掛けてやっていくことについて、会社に対する何か愛着がまた戻ってきたみたいな感じもあって、本当に生物多様性の取組というのは、従業員にとってもその家族も参加できたりするので、ちょっと広がりが広い活動ができるのかなというふうに思っております。参加した人はほぼ 100% 満足して帰っていくという感じです。

ファシリテーター

取組は社員だけではなくて地域の方々もいますか。

日本生命保険相互会社

そうですね。場所によっては地域の方々と一緒にやっていただいたりということがありますし、他の企業さんと一緒にやるとか、自治体の方と一緒にやるとかいうようないろんなバリエーションが出ています。

ファシリテーター

それがやっぱりきっかけといいますか、つなぎ目になって、会社を超えた連携だったり、地域の方々から見たときの企業に対する愛着だったりの形成につながっていくんでしょうか。

日本生命保険相互会社

あと本当にびっくりするぐらい、今の子供さんとかって、自然に触れ合っていない子供さんがたくさんいるので、何か森林に入っていくだけで喜んでいただいてというのもあります。

ファシリテーター

では、埼玉りそな銀行さんお願ひします。

埼玉りそな銀行

日本生命さんとほぼ同じですけれども、活動に参加した方のお声としては本当に充実感にあふれて、あと会社がやっているそういう活動への共感が一種のエンゲージメントみたいなものに近づいているのかなというのは毎回やるとそう感じます。

直近のアンケート、いつも分析までは行っていませんが、アンケート結果を確認していますが、100 人いたら、半分は会社の社内掲示板みたいなイントラみたいなところで、催し物の確認をして自主的に申し込む。後のほとんど 45 人ぐらいは、100 人いたら 45% ぐらいは同僚から誘

われた、会社の中で同僚から誘わされてきました。2人ぐらい、上司から言われて早速来ましたみたいな、そういう人もいます。ただ、本当にもうすごく少ない人数です。

最近は先ほどニッセイさんのお話もありましたけれども、自分ところの企業だけではなくて、周りの地域の企業さんを巻き込んで活動するというのが基本になっていて、我々も金融機関だけではなくて、地元の企業さんと触れ合いながら、良い関係ができているかなというふうに感じます。

一番そこで思ったのは、今日お配りしている小さい冊子があるかと思うんですけども、この一番最後の7ページ目。環境の話ではありませんが、下のところ、戸田市の事例が今日、戸田市さんが来ていますけれども、何か戸田で長いこと事業をやっているんだけれどもなかなか戸田市民にはうちの会社のこと知られていないんだみたいな、悩みを中小企業さんたくさん持っていて。これは戸田のいわゆる社会貢献団体に寄付をするようなスキームをうちの会社の間に入ってやらせていただいたり、ちょっと環境とは全然関係ない社会包摂の話ですけれども、やはり地元の企業は地元で何かしたい、地元に何か貢献したいって絶対考えているので、そういう活動というのは今後広がっていくのかなということで、ますますお声がけをしたいと思っています。

ファシリテーター

県内の中小企業がやっていることとか色々とあるんですね。

埼玉りそな銀行

そうですね。

ファシリテーター

環境省の大澤さんからもぜひ、県外含めてですけれども、全国の自然共生サイトに登録するような事例から何かこれをネイチャーポジティブの取組をやることで、企業としてプラスの効果があったりとか、そういうお声を聞いているようでしたら教えていただければと思います。

環境省

まだ自然共生サイトも始まって、歴史が浅いところではあります、共生サイトと絡めてどういう成果が見えてくるかというのは、これからのことろだとは思っています。

今日はこのパネルディスカッションに入って追加でご説明したスライドの、1枚目にあったように共生サイトも少し絡めながら水資源の保全とか、地域の振興をやる、それから地域のブランド、產品のブランド化というのをやっていくということが少しずつ生まれつつあると思いますので、そこはむしろ埼玉県の中から先駆的な事例が生まれることを期待したいと思っていますけれども、並行して環境省の自分の部署では、ネイチャーポジティブの成功事例とか、企業の価値向上を実際に実現した事例集を今年度、作ってまた大きく出していきたいなと思っています。

ファシリテーター

何から始めたらいいかわからない企業さんがいらっしゃると思いますが、そういったところは、今日繋がる、自治体の方々とかと一緒に共生サイトみたいなところをきっかけにしてそこから活動を展開していくということで、アプローチの最初の1つとしてあり得る方法なのかなと思います。

県内で自然共生サイトというと、例えばどんなところがあるのでしょうか。

埼玉りそな銀行

今動いているのはちょっとあれですけれども、実際にもう自然共生サイトとして登録が公開されたのは9ヶ所でしたでしょうか。

ファシリテーター

埼玉県庁の半田さんからお願いします。

埼玉県

埼玉県みどり自然課の半田と申します。

今、鈴木さんがおっしゃられたように、埼玉県内の自然共生サイトは現在9ヶ所あります、いろんなところが活動を行っているというところになります。

例えば、埼玉県では、緑のトラスト保全地という、こういう土地を皆様の寄附金で、トラスト基金という寄附でいただいたもので土地を購入して、そこをトラスト協会のボランティアの方で県民主体で保全活動を行っていたらしくという活動を行っておりまして、例えばそちらはトラスト保全地全部で14号地ありますが、その中のトラスト1号地というところ、さいたま市にあります、そちら昨年の秋に、自然共生サイトの方に登録をさせていただきました。そちらの方でも、ボランティアさんなどいろいろな保全活動や、動植物の調査などを行なながら、活動などを行っています。

ファシリテーター

ぜひ共生サイトについてご質問ある方は埼玉県の方にお問合せいただければと思います。

では次のテーマに行きます。3つ目のテーマですが、ネイチャー・ポジティブはどのような新たなビジネスを生み出したのか、また生み出すと感じるかという点です。今までCSR的な側面の話であったとは思いますが、基調講演の中でもネイチャー・ポジティブというところが新しいビジネスを生む、そのきっかけであり観点になるのではないかというところのお話しがあったと思いますが、そのあたりどのように可能性を感じいらっしゃるかというところをパネリストの方々からお伺いできればと思っております。

こちらは、まず埼玉りそな銀行の鈴木さんから、ご自身の体験の中から、ご存じのことがあれば教えていただければというふうに思います。

埼玉りそな銀行

このネイチャー・ポジティブに関して、たくさんの企業さんにヒアリングをして、どう思いますかという話から、どんなお仕事が生まれそうですかと色々と聞きましたが、残念ながら新しいビジネスを教えていただけないことというのはまだできていない。総じて皆さん言うのは、それやったら儲かるのかとか、やはり経済的なものがついてこないとちょっと無理だよねとか。あとは、自然共生サイトに関して申請するのにいくらかかるの、このぐらいですかねと言ったら、やはりゼロ1個ちょっと感覚的に違うよねとか言われたりですね。結構厳しい反応が去年からあったのは事実です。

ただいろいろお客様のお話しをお聞きすると、なぜ取り組むのか、何で取り組まなければいけないのかというのが明確に分かれば、それは自然と多分、体が動く企業もあるのではないかというのを教えてもらいました。例えば、さっきの戸田市の話ではないですけれども、ある地域で長年、中小企業として、企業をやられていて、この地域にはこういう特性があって、こういう生物が例えば絶滅の危機にさらされているとか、こういった環境が悪いから水辺がこういった状態になっているというので、1つ1つ丁寧に地域の方が理解することによって、ではそこで育ってきた企業だから一肌脱ぐかという、ここは理解できるというようなことを社長さんにも教えていただいて。

なので、我々金融機関だけでは当然できません。埼玉県さんとも組んで、あとは地元の例えば大学さんだと、そういうものを研究して研究者とか様々な方のお力を借りて、地域で細かく課題を抽出することによって企業さんの腰が上がるのかなと感じます。

ファシリテーター

ニッセイの岩本さんいかがですか。

日本生命保険相互会社

結構でもこのネイチャー・ポジティブの動きというのは、今じわっと企業に浸透している状態で、そこからいろいろなビジネスが生まれるというふうに思っています。

特に企業としては自分たちの施設だとか自分たちの持っている山とかの環境価値みたいなも

のを測らないといけないので、今まで漠然と木の本数とか面積だとかでよかつたものから、その中に生存する動物の種を見分けるような技術みたいなものは今後、大きく発展していくのではないかと思っています。

例えは、私今東北大学の近藤先生のところの環境DNAの分析に参加していますが、これは水を取ることによってその水からどういった種がいるのかというのを測っているところで、もともと環境DNAは海とか湖の技術だったのが、どんどんそれが陸上のもの、あるいは土の環境DNAみたいなものを取ったりとか、そういったところにどんどん発展していっていますので、こういった領域は大きく発展すると思いますし、それ以外にも先ほどちょっと私の資料で書きましたが、衛星画像から種の特定をするとか、面白いところで言うと音をずっと録音しておいてそこから哺乳類とか鳥類の種を見分けるとか、いろんなとにかくその自分たちの施設にある種の特定をするということに関しての技術、あるいはいろんなビジネスというのは大きく進んでいくのではないかなと思います。

それからもう1点は先ほども言ったように、今から2030年に向けて企業というのは、ネットゼロだつたりCO2削減というのが必要になってきていて、これについてJ-クレジットで省エネのJ-クレジットとか、再エネのJ-クレジットというのもいいんですが、やはり今後ネイチャーベース、自然ベースのクレジットというものが大きく拡大していくのではないかなと思っていて、既に森林の吸収のクレジットというのは相当程度普及していますし、去年ぐらいから水田のクレジットというのも出てきていますし、海の藻とか海藻から得られるJ-ブルークレジットみたいなものも今からどんどん拡大していくのではないかなと。

これについては結構地域ごとにいろんなやり方でやっているので、新しい技術が出てくるのではないかなと思いますし、そういった自然で色々と吸収する色々なクレジットはまだまだこれからいろんな種類があると思うんですね。そういったものがこれからどんどん出てくれば、いろんなビジネスの創出に繋がるし、大事なことは結構大企業はお金を持っている、大企業がCO2の削減をしないといけない、それがネイチャーベースの削減にうまく繋がれば、大きなビジネスチャンスになるのではないかなというふうに私は見ています。

ファシリテーター

ありがとうございます。

ネイチャーポジティブというところが、どの企業にとっても課題であるというところが前提にはなりますけれども、それを実現するための技術開発をしてネイチャーポジティブの課題が関係する企業さんにその技術を買ってもらうというのが1つというところと、あと気候変動と同様に排出権取引みたいな、そういったもので、ネイチャーポジティブの権利と言いますか、そういったものを作って、それを大企業に買ってもらうみたいなところが1つあります。

日本生命保険相互会社

すいません。あともう1点ありました。これは私が悩んでいることですけれども、先ほど日本生命って結構ビルをたくさん持っていて、屋上緑化はどんどんしないといけませんが、今最近ものすごく暑くて、この屋上緑化でこの夏を乗り切れる植物が本当に少なくて、1年間元気に生き続ける屋上緑化ができる何か技術を教えていただければ、これもううちの会社喜んで取り入れると思いますので、何か技術があったら教えていただければと思います。

ファシリテーター

具体的なニーズが見えると考えているところがあるかと思います。

大沢さんに伺いたいですけれども、こういったものは、海外の状況がどうなのかというところがちょっと気になると思いますが、排出権取引ではないんですけど、ネイチャーポジティブの取引だとか、そういったところは海外のほうが進んでいるのかと思いますが、そのあたりご存じでしたら教えてください。

環境省

今言われていたクレジットは、むしろ海外の方が動いていて生物多様性クレジットという概

念で、国際的な枠組みも作られてハイレベル原則、要は世界でそういう仕組みを導入するときに注意すべき考え方も整理されて、ちょうど昨年11月に生物多様性条約国際会議があったときも、交渉の外枠ではありましたけれども、そういうハイレベル原則も発表されたところになっています。

イギリスで言えば、ネットゲイン法という新しい法律が作られ、生物多様性の価値をある程度定量評価して特に開発考慮したときに開発前の生物多様性よりも、それを減らすどころかむしろプラス10%、量と質の掛け算になりますが、掛け算した結果が開発前よりもプラス10%増やすような取組がいわば義務付けられるような仕組みも導入されていますので、そういう国にとってはそのクレジットとか定量評価というのが、もう国全体で動き出していると聞いています。

また、他方でオーストラリアとかは少し前からオフセットという開発に伴って消失した自然を別の場所で代償措置で賄うという仕組みがつくられた国もあって、オフセットはいろいろ賛否両論あってうまくいってない場合もありますが、そのオーストラリアにおいても改めてクレジットという切り口で新しい制度設計がされて今オーストラリアちょっととイギリスと違って、認証型のちょっとボランタリーな仕組みですけれども、クレジットの仕組みが導入されたというふうに聞いているので、他の国がむしろ先に動いているところがあります。

日本は、そのクレジットの取組については世界の動向を見つつ、まずはその生物多様性の定量評価をすることで、どういう活用の仕方があり得るのか、またそれが取引みたいなクレジットみたいな取引になるのか、別の形があるのかというのはいろんなやり方があると思いますが、まずはそのある程度炭素みたいに定量評価して、企業にとっても使えるようなものを何か作つていけないかという課題認識はありますし、これ今日ちょっとご紹介したロードマップの整備の中でも、価値取引を見据えた価値評価みたいな課題について、ちょうど今年度以降、来年度あるいはちょっと1、2年で色々と解決できるような簡単な話ではないんですけども、これから少し数年間かけてそこの価値評価の整備をしていきたいというところになります。

ファシリテーター

ありがとうございます。

では最後のテーマに移ります。

4つ目のテーマです。企業がネイチャーポジティブを実現する取組をするにあたって、最も必要と感じることは何か、それらを補完するために必要なコト・モノ、他団体や国や県や市町村が求めることがあれば教えてくださいという質問になります。

まずは、埼玉りそな銀行の鈴木さんからお願いします。

埼玉りそな銀行

ありがとうございます。

一番感じることは、この2、3年で、脱炭素に向けたアンケートというのを1万社以上、中小企業さん、県内の中小企業さんにさせていただいている。これはリアルで聞いていて、脱炭素に対してどのように取り組んでいますか、Scope1、Scope2、経理ベースでいくらか知っていますかとか、それは社長さんだけが知っていますか、従業員さんまで浸透していますか、とか。色々と段階を踏んで色々なアンケートをとらせていただきましたが、大体7割ぐらいのお客様は、いや無料サービスがあるからそれ一回測ってもらったよ、それ以外に何もしてないみたいなところでとどまっている状況なのかなというところです。

これはもうネイチャーポジティブも同じことを言えるのかなというところで、そこから行動変容を起こすには、やはり中小企業さんが自分ごととして考えなきやいけないそれは我々もしっかり自分事として働きかけなきやいけないかなというふうに考えています。必要なことってのはやっぱり本当に分科会のキックオフじゃないですけども、こういった集まれる場所で交流を図っていただいて、新たなビジネスだととか、経営にプラスになる要素っていうのを感じていただいて、本当に小さなことから皆さんのが行動を起こすこと、これしかないのかなと感じています。

ファシリテーター

ニッセイ岩本さんお願ひします。

日本生命保険相互会社

繰り返しになりますけど、結局は何かそれぞれの地域ごとの生物種とか生物多様性のデータベースみたいなものがやはり非常にもっと簡易に取れるようになって欲しいなということが1つと、もう1つはやはり生物多様性といつても地域ごとに特性が違いますので、県内自治体がどういった生物多様性、どういった状態、どういったステートオブネイチャーを求めているのかというところをできるだけクリアに、表明していただくとありがたいと思います。

我々もいろんな活動をする上で、自分で考えてやっているんですけれどもやはりその地域が求める自然の姿みたいなものをできるだけ出していただければ我々もそれに沿った活動というのができますので、これなかなか難しいんですけども、いろんな自治体もチャレンジしてくれていると思いますので、そういったところが豊かになってくれればいいかなと思います。

あとは本当に感じるのは、やっぱり点ではなくて面、ランドスケープアプローチと言われていますけれども、自社だけでできることっていうのはもう限りがあるので、やはりその地域ぐるみ、横の連携、面で何か連携できるということがもっと盛んになってくれば、このネイチャーポジティブへの動きというのはもっと大きくなうねりになるんじゃないかなと思います。

ファシリテーター

ぜひ埼玉県に伺いたいんですけども、行政の立場から見て、企業の方々に期待することだったりとか、求めるものがあればお伺いできますでしょうか。

埼玉県

企業に求めることということで、先ほど鈴木さんの方からも分科会などをこのような集まる場所を作って、皆さん情報交換できればいいというような話もありまして、そういった形で、分科会の方を立ち上げてさせていただきましたので、こちらにいる皆様、こういった活動に色々とご興味を持っていらっしゃるということだと思いますが、そういった分科会とかにご参加いただいて、色々な情報交換とかしていただいたら、あと、企業のニーズなどを聞かせていただきますので、そういったところで、色々な企業のニーズを含めた活動ができればいいのかなと思っています。また、先ほど来、県のモデル事業の話をしておりますが、自治体が持っている保全すべきフィールドと、あとそういったところで、企業さんが活動したい企業さんがありましたら、そういったマッチングなどもしていきたいと思いますので、そういったところで、積極的なご参加とかをいただければ、こちらもネイチャーポジティブに力添えできるかなと思いますので、ご協力をお願いできればと思います。

○市町村によるネイチャーポジティブの取組事例紹介

続きまして、ネイチャーポジティブの取組事例という形でご紹介申し上げます。

今後、企業団体の皆様と連携する可能性のある市町村ではすでに共創、まさにともに作る共創により、ネイチャーポジティブの実現の取組が行われてございます。

今回は、戸田市役所様から、環境経済部みどり公園課坂田力也様にご登壇いただきまして、戸田市の取組というものをお紹介いただきたいと思います。

それでは坂田様よろしくお願ひいたします。

戸田市

ただいまご紹介いただきました戸田市みどり公園課の酒田と申します。

この度事例紹介の場をいただきありがとうございます。

早速時間も押しているようですので、戸田ヶ原自然再生事業について紹介をさせていただきます。

まず、自然再生事業というような形で名前をつけさせていただいております。ただ、これ自然再生推進法にはのっとっていない、法定外の自然再生事業という形で取組を進めている事業でございます。事業の推進に当たりまして行政だけではさすがに難しいですので専門的見地に

つきましては今日もちょっとヘルプで来ていたいしているんですけども、公益財団法人埼玉県生態系保護協会さんの方にもご協力をいただいております。

戸田市についてはご存じの方もいらっしゃるかとは思いますが、場所その他を紹介させていただきたいと思います。戸田市、ご覧のとおり県南部に位置いたしまして、市の西側と南側を荒川に接しております。市域西側に今回の事業の中心となります、荒川第一調節池がありましてその中に市の都市公園として、最大規模の彩湖・道満グリーンパークを設置しまして、そちらの公園、大体年間 100 万人以上の方にご来場いただいているところでございます。

戸田ヶ原というところで、戸田市ではないというところになってくるんですけども、かつての荒川がご覧いただいておりますとおり、大きく蛇行しておりますと、その名通り氾濫を繰り返す川でした。その氾濫原に広がった湿原のうち戸田にあったところを戸田ヶ原と呼ばれていたようです。江戸の後半には春になると、見渡す限りにサクラソウが咲き、江戸から多くの人が花見に訪れたという記録がございます。明治の後半になりますと、鉄道の開業など、交通の便が良くなりまして、更なる人気で花摘みなどにより、わずか 10 数年後の大正時代の末にはサクラソウがほとんど見られなくなっております。右上部の絵につきましては、奥野原で江戸時代のサクラソウの花見や花摘みが行われていた様子が、絵として残っておりましたので、そちらの方の紹介になります。

こちらのスライドは現在の地図にかつての戸田ヶ原の位置を落とし込んだものになります。昭和 20 年ごろまでには、河川改修ですか、開発によって戸田ヶ原は完全に失われてしましました。原風景である戸田ヶ原を取り戻すために、上流で旧河川域でもあります現在の荒川第一調節池内に位置する、彩湖・道満グリーンパークを中心に、2007 年度平成 19 年度に戸田ヶ原自然再生事業、取組を開始いたしました。

事業推進のために全体構想というものを策定いたしまして、戸田ヶ原自然再生事業の目標を 3 つ定めました。こちらにありますとおり平成 20 年に策定しておりますので、ここの中、基本構想という形で書いてはいますが、後でご説明しますけれども、今解釈するとこうなるのかなというところです。1 つ目、多様な野生の生き物を育む戸田ヶ原を再生する。こちらが生物多様性の再生、保全というところで、現在の国的基本構想の中でいくと、基本戦略 1 に該当する部分になるのかなと。2 つ目が、人と自然、人ととの交流を再生するということで自然との触れ合いですとか自然の中での体験によって、健全な心や体をはぐくめるように、人と自然の交流の場を再生、提供していくこうということで、こちら当てはめますと国家戦略の基本法、基本戦略 4 に該当できるのかなというふうに考えております。3 つ目、住みたい住み続けたいまちづくりに生かす。戸田ヶ原の自然に触れること、理解すること、事業を続けてきた人と人の繋がりなどで地域への愛着や誇りを育み、まちの魅力を高めるものです。これも国家戦略の基本戦略には 4 で該当できるのかなというふうに思っております。全体構造の中で市民の皆様に興味を持っていただけるような生き物、また、戸田の名前がつく生き物などを選定し、ご覧の 10 種をシンボル種というような形で選定しております。

全体プランに基づきまして実施計画を策定して取組を進めているところですが、シンボル種 10 種のうち象徴するような、ご覧の 5 つのプロジェクトというような形を定めて取り組んでおります。

はじめにサクラソウなど野生の草花が彩る湿地プロジェクトでは、荒川流域に生息していたと確認できたサクラソウや野草を、彩湖・道満グリーンパーク内の戸田ヶ原サクラソウ園と、戸田ヶ原野草園という区域を作りました。主たる植物は区域名のとおり再生をやっております。また、荒川第一調節池内の自然保全ゾーンにつきましては、人の出入りが制限されているため、年 1、2 回程度の管理作業しか行わない、ほぼ自然任せたサクラソウの生息地の再生を行っています。こちら戸田ヶ原サクラソウ園につきましては、戸田ヶ原自然再生事業のシンボリックな場所として市民参加型のイベントなどの開催地として活用するなど、市民の皆様にも親しまれているところでございます。

戸田ヶ原サクラソウ園では 2010 年、平成 22 年からほぼ毎年市民、学生、企業の方々とサクラソウ植栽を行っております。2024 年春の調査になりますけれども、植栽株数が、青の部分、12,000 株に対しまして、生育株数 38,000 株となりまして、サクラソウが 3 倍以上に増加しております。令和元年の台風 19 号によりましては、荒川第一調節池全域がほぼ冠水したというような状況になったので一時的に減少はしておりますが、その後も生育株数は増加をしている状態

でございます。

これは今年の春の戸田ヶ原サクラソウ園の様子として、ピンク色のものが全部サクラソウで、この奥にちょっと黄色いのが見えるんですけれども、これノウルシという植物で、天然記念物になっています田島ヶ原のサクラソウのところもこちらのノウルシ結構咲いているという話も聞いております。

その他のプロジェクトといたしまして、キツネやカヤネズミが子育てる草地プロジェクトでは生息状況調査を実施し、キツネの目撃情報ですとか、カヤネズミの巣が確認をされております。続きまして、ミドリシジミが舞う林プロジェクトとしまして、市民や学校などの協力を得まして幼虫ですとか成長のえさとなるハンノキという樹木の苗木の植栽を行ったところ、数年経ってからになりますけれども、生息が確認できるようになっております。また、カワセミが子育てをする水辺プロジェクトとしまして、巣作りをするための崖を整備したところ、営巣が確認されております。さらっと言ったんですけども、戸田の河川敷でキツネが生息していますということがまず一番のところだと思っております。

続きまして、人と自然、人ととの交流プロジェクトとして展開しております、知る・体験するということのできる場の提供です。戸田ヶ原サクラソウ祭りですとか、サクラソウ含む野生植物の展示会などのイベントを通じまして、戸田ヶ原の魅力を知っていただくだけでなく、サクラソウの植え付けのイベントや戸田ヶ原に由来する植物を使った工作イベントなどを通しまして実際の自然を体験していただいております。中央の写真が今年のサクラソウ祭りの写真になります。今回天候があまり良くなくて、小雨のちらつく中にはなるんですが、約500名の方にご参加をいただきまして、昨年は天候に恵まれていきましたので、1,000名のご来場をいただいております。あと、右上の写真、こちら、サクラソウを夏場、直射日光から守るために、いわゆるかやと言われるもののうちの、オビという植物の穂、スキみたいな形になりますけれども、そちらの穂を使って袋を作ったり、あと周辺に生えております葛ですか、本当にそのサクラソウ園内にあるような植物を使ってクリスマスリースみたいな形で作っております。それから、下ですね、こちらサクラソウ園内でその場で植物を取っていただいて、布製のエコバッグにたたきどめをしている状況です。右下につきましては、植え付けのイベントっていうような形であります。

では、これまで企業連携した事例を紹介させていただきます。イオンリテール株式会社、イオンスタイル北戸田、イオンモール北戸田店さんには、事業開始当初から、店舗内での本事業の情報発信の場をご提供いただきまして、自然保全区域の設置の際には、市民団体などとともに、サクラソウの植え付けにもご協力をいただいております。藤野先生がいらっしゃるということで存じ上げなかったのですが、実は埼玉大学の学生さんにもこちら、ご協力をいただいたということを確認しております。そういう点から自然保全区域内の外来植物の除去作業等につきましては、これまでイオンさんと事務局との間で行っております。こちら、右下の写真になりますけれども、ここに刈り取った草を集草した形のものなんですけれども、この山で約半分です。これ以上の、これの倍ぐらいのものが、取れているというような状況です。

続きまして、こちらもイオングループ、イオンさんのところになるんですけども、ご協力をいただいておりますイオンチアーズさんということで、ボランティアさんでご協力いただいております子供たちになります。こちらサクラソウ園でのサクラソウの植え付けをやっている様子とサクラソウ祭りでクイズラリーをやっているんですけどもそちらのクイズラリーの中での、答え合わせの様子になります。実質的には2月に子供たちが植え付けをいたしまして4月のサクラソウ祭りで自分たちの植えたサクラソウが咲いているのかなっていうようなことに興味を持ちながら見て、今度観察をした上で解説を聞くというような形で、結構、解説の方に聞き入っていたというようなところが印象的です。

続きまして、生活協同組合コープみらいさんになります。2007年の事業開始以来ご協力をいただいておりまして、会員様向けの会報を発行していらっしゃるのでその中でイベント情報発信ですか、会員様向けですか、一般参加のイベントの主催者として、ご協力をいただいております。また市主催のイベントへの出展協力ですか、物品提供など、これまでご協力をいただきまして、右下の写真、こちらの時は、サクラソウ園内に咲いている外来植物を抜いてその植物でもって草木染めをしたときのイベントというような形になります。

続きまして、株式会社明治戸田工場さんになります。こちらも自らご協力されたいというよ

うなことで、事務局サイドにお声掛けをいただきまして、サクラソウの植え付けイベントですか、サクラソウ祭りなどに多くの方々が参加をいただいております。先ほどパネラーさんたちのお話にもありました、社員さん同士での仕事じゃないところでの一面が見られるというような点で、若干お話しが盛り上がったりというような点があるようです。埼玉県の中で先ほど当初の中で、県の方からご挨拶ありましたとおり、中小企業さんという点ではスライドの方はご用意できていないんですけども、埼玉県電気工事工業組合の浦和支部さんにも、過去ご協力をいただいておりまして、そういう意味でも、中小企業さんとも、ご理解、ご協力いただける場所かなというような形でございます。

企業連携のご提案というような形で本市のホームページの方に掲載しているものなんですかれども、これまでご紹介した内容以外にも、連携内容、こんなことならできるよ、もしくはこんなことを我々は欲していますけど、逆に企業さんの的にはこんなことだったらできるんだけだなというようなご相談も受けておりますので、ご興味がありましたらまずご一報いただければ幸いです。これからは宣伝というような形になりますけれども、本事業の会場には都市公園というようなこともありまして駐車場が1,400～1,500台分ぐらいはありますので、そういう点でも、アクセスとしては悪くないですし、JR埼京線武蔵野線の武蔵浦和駅からの路線バスも、公園の最寄までは来ておりますので、交通の利便性といった点ではいいのかなということと、あとこの公園につきましてバーベキューが一応無料でできるというようなことで、ものは持ってきていただく必要性はあるんですけども、そういう点で、逆に作業をしました、終わって社員さん同士での交流というようなことでの場みたいなこともご提案できるかなというようなことでございます。

戸田市からは、以上でございます。

○埼玉県ネイチャーポジティブ推進分科会の御案内

埼玉県みどり自然課の半田と申します。

私の方からは、ネイチャーポジティブ推進分科会の活動、スケジュール、また入会のご案内などについて簡単にご説明をさせていただきます。

ネイチャーポジティブ推進分科会の活動内容としては大きく3つありますと、1番目が、先進事例や国や県などの最新情報などの情報提供と情報発信というのが1番目になります。2番目につきましては、色々なセミナーや交流会、シンポジウム等を通じて、自治体や環境保全団体等の皆様方と交流を図る機会というのをご提供をさせていただきます。また、3番目につきましては、ネイチャーポジティブを実現する取組を行うパートナーとなる連携先のご紹介や、国が認定する自然共生サイトへの申請など活動に関するご相談の方に対応の方をさせていただきます。

そうしまして、ネイチャーポジティブ推進分科会の入会によるメリットについてですが、例えば企業さんですと、活動の企業さんの活動のフィールドがない場合でありますと、ネイチャーポジティブ実現に向けた取り組み、例えば自治体のフィールドで取組ができるとかそういうところで参加できるようになります。また、地域への課題解決への協力ができる形になりますし、また企業さんでお持ちの活かせそうな技術や知見、ノウハウについて提案をしていただくことができる形になります。また、市町村様のメリットにつきましては、市町村様で保有しているフィールド、緑地でしたり、湿地とかそういうところで、企業と連携した取組へと展開できることになりますし、また、そういうもの以外でも希少種の保全等についても、企業との連携した取組などができる形になると考えております。そうしまして、分科会の今後の活動のスケジュールについてですが、まず本日キックオフイベントを実施させていただいた形ですが、今後、企業の皆様方、また市町村の皆様方にニーズや、あと保全、市町村の方でお持ちの活動できるフィールドなどを紹介などをかけさせていただいて、そういう形で、9月から11月ぐらいに企業と市町村の交流会ということで、活用を進めたいフィールドを持つ、市町村の方々と、あとフィールドでの活動を希望される企業の方々との交流会、3回開催を予定しておりますが、そういう交流会を開催したいと考えております。そして、交流会の方でマッチングなどができましたら、実際にこのワーキンググループというものを立ち上げまして、どういった活動ができるかというところのプロジェクト企画などをやっていきたいと考えております。そうしまして、そういうワーキンググループなどを終えまして、最終的にはネイチ

ヤーポジティブを実現する活動を始められるようにしていければなと考えているところになります。

そうしましたら、ネイチャー・ポジティブ推進分科会の方につきましては、企業をはじめ、様々な主体の皆様の参加の方を求めております。そして、活動の参画については、まだ無理のない範囲で構いませんし、それから交流会参加とかフィールドの活動とか、そういうことをまだ考えていませんことであっても、例えばネイチャー・ポジティブに関する情報収集の参加などでも構いません。そういう形でも構いませんので、皆様、積極的なご参加をいただければと思いますのでよろしくお願いします。

私の説明は以上です。